Vol. 86

源氏枠

— げんじわく —

節句人形 素朴なギモン

2024年のＮＨＫ大河ドラマは「光る君へ」。このドラマの主人公が『源氏物語』を執筆した紫式部であることから、今年は平安時代や『源氏物語』に注目が集まっています。そこで今回は源氏物語にちなんで名付けられた雛飾り“源氏枠”についてご紹介します。

江戸末期の源氏枠飾り雛
日本玩具博物館所蔵

大正時代の源氏枠飾り雛
日本玩具博物館所蔵

源氏物語絵巻（住吉具慶筆）東京国立博物館所蔵
出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム（https://colbase.nich.go.jp/）

西の雛文化として発展した御殿飾り

桃の節句に雛人形を飾る風習は江戸時代に広まったが、京都を中心とした上方と江戸とでは、飾り方の流行や好みにも違いがあった。特に江戸後期以降、江戸では雛壇の最上段に親王飾りを並べ、下段にさまざまな人形やお道具類を添えた「段飾り」が好まれたのに対して、京阪神では「御殿飾り」が好まれたようだ。

御殿飾りとは、御殿（高貴な人の住まい）をかたどったミニチュア建物の中に男雛・女雛を置く飾り方のことだ。御殿の中や周囲に、宮廷の女官である官女や、貴人の身の回りのお世話をする仕丁、警護を担当する随身などの人形を配置するものもあった。

御殿飾りは江戸時代から昭和にかけて主に京阪神で流行。大正時代から昭和30年代にかけては静岡が御殿の一大生産地であったことから、東海地方から京阪神を中心に西日本一帯に広まった。なお、静岡製御殿は北関東など、東日本で普及していた地域もある。

『源氏物語絵巻』になぞらえた源氏枠

雛飾り用御殿には、建物の屋根や天井があるものと、ないものがある。後者が、大和絵の手法のひとつである吹抜屋台（屋根や天井を描かずに梁や柱だけを残して、建物の中の様子を斜め上から俯瞰するように描く手法）に似ていたことから、このような形態の御殿を『源氏物語絵巻』になぞらえて「源氏枠」とも呼んだ。

御殿飾りの御殿は、江戸時代から京都御所の紫宸殿をイメージして作られたものが多く、江戸東京では将軍家に遠慮してか「御殿を飾ると身代が曲がる」などと忌避されたという。一方、御所のお膝元の京都では、明治時代から昭和初期にかけて檜皮葺きの高級な御殿が多数作られた。昭和30年代までは人気があった御殿飾りだが、組み立ての面倒さなどから昭和40年代以降は姿を消し、今ではほとんど作られていない。

御殿飾りは現在も各地の博物館や郷土資料館に所蔵されており、桃の節句の時期になると、ひなめぐりイベントなどでお目見えすることがある。『源氏物語』が注目を集める今年は、平安絵巻や宮廷人の暮らしを想像しながら源氏枠のお雛様を観賞してみてはいかがだろうか。

監修：林直輝さん（日本人形文化研究所所長）／**写真提供**：日本玩具博物館